

# JDR、それぞれのストーリー

専門技術を持ったスペシャリストが集結する国際緊急援助隊。

現場を経験した彼らの“それぞれのストーリー”とは一。

## 大西 健児さん

東京都立墨東病院  
感染症科



### 医師としての任務を全うする

JDRへの参加は、JDR医療チームの立ち上げにかかわった勤務先の上司に勧められたことがきっかけです。パキスタン洪水の時は発災から1カ月以上経過してから現地に入ったのですが、第一印象は「ひどい」の一言。マラリアなど感染症が広がっていました。40度を超える暑さの中、多い時には1日約300人を診察。医師4人、看護師7人がフル稼働しました。マラリア治療の投薬には、量やタイミングにコツがあります。私は感染症が専門なので、その知識が大変役立ちました。言葉の壁があり現地の人たちとコミュニケーションをとるのは大変でしたが、重症の患者さんが元気になってくれるとやっぱりうれしい。JDRに参加する医師も看護師もプロ。日本でも海外でも、いかなる時でも臨機応変に医師としての仕事をこなしていきます。



## 中園 将大さん

警視庁警備部 災害対策課  
特殊救助隊



### いち早く現場に駆けつける

警視庁では大規模災害に備え、災害救助を専門とした「特殊救助隊」を設置し、ほぼ全員がJDRに登録しています。私自身が初めて海外での救助活動を経験したのはインドネシア西スマトラ州パダン沖地震。倒壊したショッピングセンターや教会、学校などで、懐中電灯の明かりを頼りに行方不明者を捜索しました。残念ながら生存者は発見できなかったのですが、海外の救助隊として最初にこの地域に入ったのは日本。そのことは誇りに思えました。一方で、これまでの訓練と現場のギャップを痛感し、その時々状況に合わせた判断の重要性を実感しました。東日本大震災では福島、岩手、宮城で救助活動を行ったのですが、このインドネシアでの経験を踏まえ、自分たちの技術をその場の状況に合わせて応用できるよう努めました。



## 増田 由美子さん

埼玉医科大学総合医療センター  
高度救命救急センター



### 現地の人たちとのコミュニケーションを大切に

看護師として、世界で困っている人を助けたい。これが、私がJDRに登録したきっかけです。海外の被災地では時間も資機材も限られているため、すべての患者さんを診ることは難しいのが現実。そこで採用しているのがトリアージです。パキスタンでは、緊急に治療が必要な患者さんに優先度を付けるこの作業を看護師が行いました。また、毎朝人ごみの中に入り、脱水症状のある子どもやぐったりしている人がいないか見て回り、診察の整理券を配ったりもしました。さらに、覚えてたの現地語で、できるだけ多くの人に話しかけるようにもしました。患者さんは「思い」を聞いてくれる人がいるだけで安心できるからです。彼らからもらった「ありがとう」という言葉と笑顔。私にとってそれが一番のやりがいです。



## 中野 貴光さん

札幌市消防局  
豊平消防署 平岸出張所



### 救助に国境はない

人の命を救いたい。そんな思いから消防士になり、市民の命を守るため日々活動しています。JDRは国境を越えて、私の思いを実現できる場。ユニフォームにそでを通し、胸に日の丸をつけるのが引き締まりますし、日本を背負っているという責任を感じます。インドネシアでは日本とまったく違う環境の中、行方不明者をなかなか発見できず、焦りや不安を感じることもありました。しかしそんな時、10歳ぐらいの少年がそばに寄ってきて「サンキュー」と声をかけてくれたんです。その瞬間、その場にすることが国際貢献の一つなのかもしれないと、救われた気持ちになりました。困った時は助け合う。救助の世界に国境はありません。同じ志と使命感を持った仲間と共に、これからも国内外、関係なく任務を遂行していきます。



## 小西 英一郎さん

独立行政法人国立病院機構  
千葉東病院 放射線科



### X線撮影で適切な診断方法へと導く

日本の災害医療の拠点である独立行政法人国立病院機構災害医療センターで勤務していた時、国内で災害救助を行う災害派遣医療チーム(DMAT)を通じてJDRの活動を知りました。JDRが2005年から持ち運びができるX線撮影装置を導入したことを聞き、海外で自分の技術を生かせるチャンスだと思いました。ハイチでは外傷の患者さんが多く、骨折しているかどうかで治療方法を変える必要がありました。そこで活躍したのがX線撮影装置。ベッドがない状況で重症の患者さんの体に負担をかけないよう、撮影の角度を変えたり毛布を敷いたりなどの工夫をしました。“当たり前”が通じない環境で活動したことをきっかけに、今の職場でもより患者さんのことを考え、積極的にコミュニケーションをとるように心掛けています。



## 寺島 龍也さん

海上保安庁  
第九管区海上保安本部  
新潟海上保安部 巡視船やひこ



### 警察、消防、海保の強みを生かして

海上保安庁では、潜水士を中心にJDRに登録しています。私は普段は巡視船を動かす航海士、そして海難救助を行う潜水士として活動していますが、JDRの訓練では、コンクリートカッターを使った救助や、その場にある木材で建物の補強をしながら行う捜索など、あらゆる状況を想定した技術を学びました。海と陸、たとえ現場が変わっても、海上という厳しい環境で培われた危険予知や安全管理などのスキルは、陸上でも発揮できます。インドネシア西スマトラ州パダン沖地震ではチームの取りまとめ役として、警察、消防、海保の隊員たちが、それぞれの強みを生かせる役割分担ができるよう努めました。JDRの活動を通じて他の組織との連携を強めることができるのは、日本の救助技術向上のためにも大変意義のあることだと思っています。

